

全日本語りネットワーク

2007. 7. 1 発行

〒376-0045 群馬県桐生市末広町 5-19
桐生市市民活動推進センター 内
(Fax) 0277-47-4067 (振替) 00130 - 2 - 114808
(E-mail) Japankatarinet@aol.com
(HP) <http://members.aol.com/Japankatarinet/>

ニュース

平和を語る

東京都北区 尾松 純子

映画館の暗闇にとどろく爆音の中に身を縮めていた。極限状況の銃撃戦が続いている。1945年2月の“硫黄島の戦い”だ。同じ戦いを日本側から描いた『硫黄島からの手紙』とアメリカ側から描いた『父親たちの星条旗』という映画である。(どちらもかつての“ダーティーハリー”クリント・イーストウッド監督のアメリカ映画ではあるが。)

2本立てで観たせいもあるのだろうが、目をふさぎたくなる戦闘シーンが過剰に思えてくる。夥しい数の死が目の前に吹き飛ばされてくる。これが戦争のリアリティだとばかりに“残虐”が様々な形象となって、前面に押し出されてくる。映画は生きてこちら側にいる人間に、これが現実だったという現実をつきつけてくる。大きな愚かさの空洞の中に響きわたる、恐怖と苦痛と無念の慟哭が、重なり合う声、声、声・・・となって迫ってくる。そして映画は、そこを生きた人々の命を手渡してくる。

“戦争を知らない子ども”だった頃、父や母の話の多くは戦争の話だった。間断なく襲ってくるB29による空襲の恐怖や戦場の狂気にふるえながら、そこを追体験していた。

戦争の世紀と呼ばれた20世紀が終り、時が21世紀を刻み始めるや、時代が後戻りしていくような戸惑いを感じている。何とか押しとどめなければという焦燥感に煽られる。“戦争を知らない大人”として、20世紀の痛みや、父や母の時代を体に抱え、手渡されたたくさんの命をどう生かしていくのか、ということが問われているような気がしてならない。

歴史が逆行していくような大きな流れを押しとどめ得るのは、私たち一人一人でもあるはずだ。

手渡されたものを、受け取ったものを、確かな平和を紡ぐ一本の糸として、次の世代へつないでいけるように・・・と、自分自身に祈るかのような心境に続いている。

*

*

*

8月22日(水) ネットワークのお話練習会で『カッパ淵のうた』(菊池澄子作)を語らせていただきます。1945年の日本の山奥の村に、日常としてあった戦争の話です。もしかすると私の足元かもしれない日本の1945年です。そしてまた、映画は、今“人間の足元”を見つめるかのように『約束の旅路』(ラデュ・ミヘイレニア監督 仏映画)と『パラダイス・モア』(ハニ・アブ・アサド監督 仏・独・蘭・パレスチナ映画)を私たちに届けてくれました。

“私の足元”をたどることが、“人間の足元”へたどり着くことを祈りながら、語り続けていたいと思うのです。